

第二章 空蟬の物語

[第一段 空蟬の夫、伊予国から上京す]

さて(さて話は戻るが源氏は)、かの空蟬の(紀伊守邸の空蟬女の)あさましく(呆れた)つれなきを(拒絶振りを)、この世の人には違ひて思すに、おいらか(素直に)なら(して)ましかば(いたなら)、心苦しき(気が引ける)過ちにて(間違いだたと)やみぬべきを(止めて置くものを)、いとねたく(此の儘ではとても悔しくて)、負けてやみなむを(嫌われた形で終わるのを)、心にかからぬ折なし(気に掛けない時は無かった)。かやうの並々までは(このような並の身分の女までは)思ほしかからざりつるを(以前なら気に掛かる事は無かったのだが)、ありし(先の)「雨夜の品定め(あまよのしなさだめ)」の後、いぶかしく思ほしなる(興味を待たれた)品々あるに(色々な身分の女がいたので)、いとど隈なく(およそ全ての階層の)なりぬる(女を知りたがる)御心なめりかし(御気持ちのようだった)。

うらもなく(源氏の愛を疑わず)待ちきこえ顔なる(お待ち申すという風な)片つ方人を(かたつかたのひとを、もう一人の方とは、即ち西の君を)、あはれと思さぬにしもあらねど(可哀相に思わないでもなかったが)、つれなくて聞きあたらむことの(自分を拒み続けて一向に絆されて来ない空蟬に)恥づかしければ(極まり悪さを感じるので源氏は)、「まづ、こなたの心見果てて(此方の気持ちを確かめてから)」と思すほどに(とと思っていると)、伊予介上りぬ(空蟬の夫の伊予介が任国の伊予から宮処に戻ってきた)。

まづ急ぎ参れり(伊予介は方違えなどで引き立てを得た主人筋の源氏の許に、紀伊守から報告を受けてか上京早々早速に挨拶に参上した)。舟路のしわざとて(船旅の所為か)、すこし黒みやつれたる旅姿(日焼けして痩せて帰った姿は)、いと(全く)ふつつかに(武骨で)心づきな(優雅さが無かった)。されど、人もいやしからぬ筋に(元々が良い家柄で)、容貌などねびたれど(顔容など老けてはいたが)、きよげにて(端正で)、ただならず(優れていて)、気色よしづきて(なかなかの男前)などぞ(でこそは)ありける(あった)。

国の物語など申すに(伊予介は源氏に伊予の国情などを話して、源氏も)、「湯桁はいくつ(温泉の具合は)」と、問はまほしく思せど(御聞きに為りたくも有ったが)、あいなくまばゆくて(女を寝取ったのだから、どうにも気まずくて)、御心のうちに思し出づることもさまざまなり。

「ものまめやかなる大人を(実直な年配者を)、かく思ふも(このように見ていることは)、げに(何と)をこがましく(不届きで)、うしろめたき(気の引ける)わざなりや(ものだろうか)。げに(実に)、これぞ(これこそ)、なのめならぬ(並ならぬ)片端(かたは、体裁の付かなさ)なべかりける(というものではあろう)」と、*馬頭(うまのかみ)の諫め思し出でて、いとほしきに(源氏は伊予介が気の毒になって、その妻たる空蟬の)、「つれなき心はねたけれど(自分を拒む気持ちは疎ましいが)、人のためは、あはれ(伊予介の為には立派だ)」と思しな(とお思いになる)。 *左馬頭は「雨夜の品定め」で、不貞女は夫の名誉を傷付けると諫めていた。しかし空蟬に不貞を働かせた者こそは源氏其の人

で、それも無理強いであった。にも関わらず、一度は思い合った仲で在るかのような源氏の認識振りから推し量ると、やはり当夜の空蟬の性反応は余程奥床しいものだったのだろうか。

(その挨拶の中で)「娘をば(近い内に娘の西の君のほうを)さるべき人に(誰か適した者に)預けて(嫁がせて)、北の方をば(妻の空蟬のほうを)率て(連れて)下りぬべし(任国へ赴く心算です)」と(と伊予介が話していたのを)、聞きたまふに(源氏は御聞きに為ると)、ひとかたならず心あわたたくして(非常にそわそわされて)、「今一度は得(え、何とか)あるまじきことにや(空蟬に逢う手立ては、ないものだろうか)」と、小君を語らひたまへど(小君に相談為されたが)、人の心を(空蟬が再会を)合せたらむことにてだに(同意した場合でさえ)、軽らかに(簡単に)えしも(逢おうとして)紛れたまふまじきを(忍び通うのは難しいのに)、まして、似げなきことに思ひて(空蟬は源氏とは身分違いに思って)、今さらに(今後は)見苦しかるべし(逢うべきではない)、と思ひ離れたり(とあって源氏を遠避けた)。

さすがに(とはいえ空蟬にしても)、絶えて(これきりで源氏に)思ほし忘れなむことも(すっかり忘れられてしまうのも)、いと言ふかひなく(とても悲しく)、憂かるべき(情けない)ことに思ひて(事とあって)、さるべき折々の(季節変わりの挨拶として源氏が贈った歌への)御答へなど(返歌などは)、なつかしく聞こえつつ(親しげに差し上げて)、なげの(何気なく入れ込まずに)筆づかひに(書き流して)つけたる言の葉(詠んだ言葉が)、あやしく(妙に)らうたげに(可愛げが有って)、目とまるべき(源氏の目に止まるような)ふし加へなどして(一節が加えられたりして)、あはれと思しぬべき(源氏も愛しさを覚えてしまう)人のけはひなれば(空蟬の様子だったので)、つれなくねたきものの(源氏は空蟬に拒まれた事は憎かったが)、忘れがたきに思す(今なお空蟬を忘れられずに居たのだった)。

いま一方は(ひとかたは、もう一人の西の君のほうは)、主(ぬし、亭主が)強くなるとも(決まった後でも)、変らず(今と同じように)うちとけぬべく(心を許しそうに)見えしさま(見える様子)なるを頼みて(なのを頼みに思って)、とかく聞きたまへど(姫の婿取りの話は色々と耳にしてはいたが)、御心も動かさずぞありける(源氏は動じられることはなかった)。